

●奨励賞【論文概要紹介】

食物を大切にし、 感謝の心をもって食事 ができる子どもの育成

広島県呉市立吉浦小学校 いけのしんいちろう
池野進一郎

【実践の概要】

スーパーマーケットの食料品売り場に行くと、多くの加工済みの食料品が並んでいる。魚やエビ、貝、野菜などは姿形がはっきりと分かるが、牛や豚、鶏などの姿形を想像する人はほとんどいないだろう。ましてや、子どもたちは、私たちの生活が「身の回りにある生き物の命によって支えられている」ということをほとんど意識していないのではないだろうか。食物の命に対して感謝し、食事を作ってくれた人に感謝し、その食材に関わるすべての人たちに感謝し、『いただきます』という言葉の意味にも気付かせたい。

それにより、自分の命は食物（他の命）によって支えられていることを知り、命の尊さを感じて自他の生命を大切にしようとすることができると考え、本実践を行った。

【論文内容の紹介】

1 食に関する指導内容関連構想図の作成

体験的な活動を生かし、子ども同士が関わり合う食育の授業づくりをねらいとして、食に関する指導内容の6項目（『〈重〉食事の重要性』『〈健〉心身の健康』『〈選〉食品を選択する能力』『〈感〉感謝の心』『〈社〉社会性』『〈文〉食文化』）を4年生の社会科、算数科、総合的な学習の時間、学級活動、道徳の時間、給食の時間などに

位置付け、関連させる指導計画を作成した。

本研究では学級活動、総合的な学習の時間、道徳の時間の三つの授業を関連させた実践の報告を行った。

2 授業実践

(1) **学級活動** 「給食の献立調べ ～命のある食材をさがそう～〈感・文〉」

「牛乳は命？ それとも命じゃない？」

話し合うと、献立表にある牛乳は「牛から採られて、命とつながりがあるから命がある食材」ということになった。命とつながりのある食材を探することで、『食べる』ということはたくさんの命をいただいているということだから、「心を込めて『いただきます』を言おう」という意欲を育てることができた。

(2) **総合的な学習の時間** 「やさしさをみつけよう ～大根を育てよう～〈感・選〉」

「からい～！」

育てた大根の芽を間引きして口の中に入れると、このような声が一斉に上がった。しかし、自ら世話をし、観察してきた大根であるため、子どもたちは頑張って残さずに食べた。大根が嫌いな子どもも食材への愛着や食物の生産者への感謝の心を養うことができた。

(3) **道徳の時間** 「Pちゃんをどうする？ 3-
-2)生命尊重〈感〉」

Pちゃんを「下級生に引き継ぐ」か、「食肉センターに連れて行く」か

黒田恭史（著）『豚のPちゃんと32人の小学生 命の授業900日』を参考に、子ども同士が関わり合えるジレンマ資料を作った。卒業を目前にし、4年生から育ててきた豚のPちゃんをどうするべきか、自分たちが大根やペットを育ててきた体験をもとに話し合った。どちらの立場を選んだ子どもも、生命の尊重、生命への責任という視点から意見を出し合い、関わり合うことができた。

【まとめ】

事前事後アンケートやワークシート、観察記録などへの記述内容から、食物の命や食べ物を作ってくれる人への感謝の気持ちが育ったことが分かった。

食事の時、感謝の思いを込めて『いただきます』と言える子どもたちをこれからも育てていきたい。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

面白さ楽しさを 実感できる 「歴史の授業」を創る

山口県宇部市立藤山小学校 うえき かずや 植木数弥

【実践の概要】

高学年になるにつれて、「社会科の授業は楽しいですか？」という問いに対して、「楽しくない」「面白くない」という声が増えてくる。「覚えることが多過ぎる」「難しい語句がいっぱい」というのが主な理由だ。6年生で始まる「歴史の授業」は、その最たるもので、社会科の授業は、特に不人気な科目となってくる。

しかし、これは裏を返せば、子どもたちの知的好奇心を喚起する楽しい授業を提供できれば、子どもたちが社会科の授業に対して持っている「楽しくない」という意識を払拭できると考えた。

本研究では、「歴史授業の楽しさ」をいかに生み出すかの実践を示し、その有効性を検証していく。

【論文内容の紹介】

1 楽しい「歴史の授業」づくりのポイント

授業に面白さを生み出す条件を次の八つと考えて授業づくりにチャレンジしていった。

- 1 子どもの常識と〇〇時代の常識のズレに注目
- 2 その時代の文化を復元する創作活動
- 3 授業の終わりに謎解きを仕組む
- 4 歴史上の出来事を再現ドラマで
- 5 他教科とのコラボ
- 6 プレゼンを使って視覚に訴える
- 7 教師のパフォーマンス
- 8 子どもの評価を次の授業に活かす

子どもたちの考えや常識とその時代の考えや常識のズレにスポットを当て、授業づくりをしていくと面白さは倍増する。

平安時代の授業では、梅ちゃん先生こと堀北真希やAKB48の大島優子の写真を提示し、美人の条件を尋ねた。現代美人の条件は、顔は小顔、目はぱっちり大きくて二重、鼻はすんなり高い、口はやや大きめ。

次に「平安時代のとびきりの美人を紹介するよ」と言って、源氏物語絵巻から平安美人を提示。「えーこれが美人なの？」と声上がる。平安時代の美人の条件は、顔が大きくて色白で髪が長い。現代の美人の顔と平安時代の美人の顔の大きさの違いに驚く。そこから、「平安時代は、どうして顔が大きいのが美人なのだろう」という課題が生まれる。

その課題を追究していくと、寝殿造りという昼間でも暗い建物で暮らすようになった平安貴族のくらしでは肌の白さが求められるようになったことがわかる。現代と平安時代の美人の条件のズレから授業の活性化が生まれた。

縄文土器づくりや雪舟の水墨画、葛飾北斎の浮世絵の模写に挑戦するといった創作活動にチャレンジさせることも授業を楽しいものに変えていく。

授業の終わりに大きな謎解きを用意するのも授業を活性化していく。

戦後の授業では、アイスランド、スウェーデン、フィンランド、デンマーク、スイス、ブータン、そして日本の国旗を黒板に貼り、「この8か国に共通していることは、何だろう」と発問。調べていくと、第二次世界大戦が終わって以来、戦争を一度もしていないことがわかる。

特に、日清戦争、日露戦争、太平洋戦争と戦争を繰り返してきた日本が、どうして戦後67年もの間、戦争を一度もしなかったのか調べたくなる。課題を追究していくことで憲法9条の存在にたどりつく。

歴史上の出来事をダイナミックな再現ドラマで行うのも授業を格段と面白くする。学習発表会で、長篠の戦いを再現した。体育館のステージに馬防柵をセットし、ほうきで作った火縄銃も用意。火縄銃の三段撃ちをすることで、信長の頭のよさを実感できた。

資料をプレゼンで提示して、視覚に訴えたり、他教科とコラボしたりすることも授業を活性化させる。教師のパフォーマンスも授業を盛り上げる武器になる。子どもの授業評価も授業をもっと楽しいものにしていくヒントとなる。

2 成果と課題

八つの条件をいつも頭に置いて授業を重ねてみて、社会の授業が楽しいという子どもが7割を超えた。ただ、教師が面白いと思うことと子どもが面白いと感じることにズレがあって、ここで課題が生まれるはずだと予想していても結果として課題が生まれなかったことがあった。

実践を通してわかったことは、「子どもが望んでいるものを子どもの予想しなかった形で提示する」ことが、授業を活性化するエネルギーになるということだ。そのためには、子どもの興味・関心や学習意欲を喚起させる教材は何かをキャッチするアンテナに、磨きをかけることが大切だ。子どもの視点で物事を見つめ、子どもが食いついてくる教材を開発していくこ

とに今後も力を注いでいきたい。

●奨励賞【論文概要紹介】

自閉的傾向を有する 生徒への十進法の指導

～自閉的傾向を有する生徒に対する数の
認知様式を応用した指導～

宮城県立西多賀支援学校 わたなべ **渡部** けい **敬**

【実践の概要】

十進法システムが理解できない生徒への認知様式に応じた指導方法は、指導方法が確立されているとは言い難く、教師側も試行錯誤の連続である。本研究で紹介する指導方法は、各位に一つの「色」を対応させることにより学習障害(LD)・知的障害特有の学習困難を改善させ、さらに、十進法の学習前に、ビーズと袋という具体物から、N (N=2~9) 進法を体験させることにより、位取りの本質の一つである「ひとかたまり」を、本人自らの体験として、認知させることを特徴とする極めて効果的な指導方法である。

本指導方法は、汎用性が高く、十進法システムの理解が不十分な生徒に大きな効果が期待されると考えられるため、いろいろな先生方に取り組んでいただきたいと考える。

【論文内容の紹介】

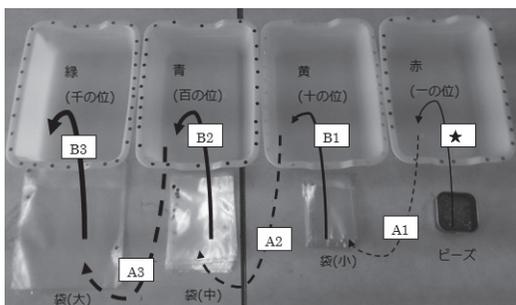
1 実践した指導

119の次は200ですというような学習障害・知的障害をもつ児童が、正しく十進法システムを理解するための指導方法及び理解が定着するト

レーニング方法を開発した。

二つの数の大小関係については、その判断に要する時間がどれくらいであるかにつき、距離の効果が成立することが分かっている。距離の効果とは、実験者が二つの数の大小比較の問題を出し、被験者がどちらが大きいかを答え、その発問から解答までの反応時間を計る。二つの数が近ければ近いほど時間がかかり(数の距離に反比例)、さらに、二つの数が共に大きければ大きいほど時間がかかるといものである。これを前提とするならば、十進法のシステムの理解の困難さは、数を厳密に把握する脳の機能(左脳ベース)に関して何らかの問題があると考えられ、この問題は、適切なトレーニングにより改善できると考えた。

具体的なトレーニングに入る前に、一般に自閉的傾向がある生徒は、こちらが発したキーワードを、こちらが意図したように理解しないケースが多々あり、十進法の理解のキーワードである「ひとまとまり」も、誤って理解している可能性がある。この点で何らかの対策を立てる必要があった。そこで、「ひとまとまり」を体験によって理解させるため、二進法から九進法までをビーズの袋詰めをする、という体験を通して理解させ、これを踏まえて十進法のトレーニングを行った。



2 成果と課題

119の次は200ということはなくなり、1000までの数において、任意の与えられた数値に対して、プラス1の数を答えることは間違いなく解答することができるようになった。現在は、「色

そろばん」という教材を考案し、これを用いて加法・減法の指導を行っている。現在は二桁の暗算をほぼ間違いなくできるような力を付けてきている。

詳しくはwebで「色そろばん」と検索するか、<http://irosoro.main.jp/>を参照していただきたい。